宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像会
〒811-35 福岡県宗像郡玄海町
電話 0940－62－1311(代)
定価 一年送料共 1000円

表千家家元 献茶祭 斎行

秋季大祭の神賑いも一段落し、黄金色に輝く稲穂が頭を垂れ、秋本番の十月十七日、当大社秋の恒例行事である出光興産株式会社奉納表千家奉仕による献茶祭が、宗像大神の神前で厳粛に斎行された。

例年の献茶祭は、表千家家元直々の奉仕により点られた二服のお茶が神前に奉献されるが、本年は家元の名代として、久田宗也宗匠による奉仕で執り行われた。

当日は、将に秋晴れの絶好の日和に恵まれ、早朝から県内はもとより、山口、九州各県の同門会々員、また茶道に勤しむ人々が続々と参集、境内は和服姿の女性達で溢れ、華やいだ雰囲気が漂った。

定刻、一鼓を合図に、奉仕神職は斎館前庭より、久田宗匠以下介添役の家元関係者、出光興産株式会社会長出光昭介氏外役員、同門会関係者は勅使館前庭より参進、祓舎にて合流し、修祓を受け本殿へと進み、各々所定の座へ着座すると、典儀の進行により、献茶祭が開始された。

祭典は斎主が、奈良時代に大陸より伝播し、平安時代より次第に人々に親しまれ、今日では我が国の文化を代表する一つとなった茶道の興隆と、「茶の湯の聖」と称えられる「千利久」の正統を受け継ぎ、四百年の伝統を誇る不審庵表千家の隆昌、更には同門会のますの発展を祈念する祝詞を奉上、斯道の振興が祈られた。

続いて久田宗匠による献茶の儀が行われた。宗匠は拝殿にしつらえられた風炉前に端座し、切柄杓の手許違わず、袱紗さばきも鮮やかな、動と静とが見事に調和した御点前を披露した。

宗匠の御点前を拝観しようと、拝殿周辺を立錐の余地もないほど埋めた参列者は、その一挙手一投足を見逃すまいと、真剣な眼差しで宗匠の作法を見詰め、あたりは咳一つない張り詰めた静寂につつまれた。

宗匠は先ず、金の茶碗に濃茶を点てられ、雅楽の調べが流れる中、神職の手により神前に奉献された。次いで銀の茶碗に薄茶が点てられ、濃茶同様神前にお供えされ、宗像大神の神慮をお慰め申し上げた。

献茶の儀が無事終了すると、それまでの緊迫した雰囲気から解放された参列者は、和やかな表情へと一変、家元名代を恙無く勤められた久田宗匠の表情にも、安堵の様子がうかがえた。

最後に、斎主、奉仕神職と当大社職員、久田宗匠と家元関係者、出光昭介会長と出光興産株式会社役員、同門会関係者が各々玉串拝礼を行い、一時間余に及ぶ本年の献茶祭も滞り無く終了した。

献茶祭が終了すると参列者は儀式殿に設けられた出光席、斎館に設けられた同門会席へと足を運び、茶席の掛軸、花器、硯箱等の逸品を愛でながら、心静かにお茶を戴き、至福の一刻を過ごして、錦秋の一日を当大社の神苑で心ゆくまで楽しんでいた。

一席の副席も午後四時過ぎには人影もとだえ、表千家家元の赤誠と、出光興産株式会社を始め関係各位の御尽力により、当大社の秋を彩る神事も盛会裡に幕を閉じた。

神具・装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
福岡店 福岡市博多区東公園二－三一（〒812）
電話 福岡(九二)六五一－九四五六番
本店 京都市下京区油小路六条北入（〒600）
電話 京都(〇七五)三四一－三三四一(代)－四番
京都(〇七五)三四三－三三四一－一番

沖・中両宮 秋季大祭を斎行

去る十月十五・十六日（旧暦九月十四・十五日）の両日、宗像大社沖津宮・中津宮両宮の秋季大祭が厳粛盛大に斎行された。

大祭の準備は八月二十一日の注連縄用新藁収集から始まった。沖・中両宮奉賛会役員並びに同翼賛会、敬神婦人部の奉仕により藁干し、藁すぐり作業が行われ、九月十七日には、地元農家の助勢を得て真新しい注連縄が調整され、中津宮拝殿、神門、御嶽宮に懸けられた。更に十月十四日、十五日には、沖津宮遥拝所、御嶽神社、中津宮の清掃と社殿装飾、奉納演芸舞台設置等が各役員の奉仕作業により行われ祭典準備が万端整えられた。

大祭準備もすっかり整った十五日午後三時に地主祭を、同五時には沖津宮宵宮祭と中津宮宵宮祭を斎行、明日の大祭が無事斎行されるよう祈念された。

翌十六日、爽やかな秋晴れとなる。午前八時三十分、宮崎地区に鎮座する厳島神社に於て、遠藤奉賛会副会長、宮本区長外地元の氏子多数参列のもと秋季大祭のもと秋季大祭が斎行された。

午前九時、沖津宮秋季大祭が、岩瀬の断崖に立つ遥拝所に於て、海上遥か沖合の沖津宮を拝しながら斎行された。

同九時三十分より大島最高峰の御嶽山々頂に鎮座する御嶽宮の秋季大祭が、農業関係者、氏子崇敬者多多数参列のもと斎行され、祭典終了後、参列者一同は、山頂からの大展望を楽しみながら神酒を戴いた。

午前十一時より、中津宮秋季大祭が斎行された。

祭典は修祓の後、太田権宮司が国家・皇室の弥栄と国民の幸福と海上安全、漁業繁栄とを祈る祝詞を奏上、続いて遠藤一雄氏が氏子を代表して奉幣詞を奏上、巫女二名による、浦安舞が奏された。次に玉串拝礼が行われ、佐藤奉賛会長を始め参列者が次々と敬虔な祈りを捧げ祭典は終了した。

引き続き感謝状贈呈式が行われ、永年に亘り沖・中両宮奉賛会長、同敬神婦人部長として誠心誠意御奉仕をされた目原徳夫氏と船越絹子氏両名に、又、注連縄用新藁奉納の遠藤英樹氏と寺島元日出氏の各氏に感謝状と記念品が贈呈された。

その後、照海殿に於て直会が盛大に催された。

また午後一時三十分より本殿横に設けられた仮設舞台に於て、各区代表、田志里一座、中村社中等氏子による演芸会が催され、舞踊歌謡二十数番が披露された。子供から大人迄のそれぞれの熱演に境内を埋めつくした観衆から盛んな拍手が送られていた。

この奉納演芸大会も、午後四時半前にはすべてのプログラムを終了。神人和楽の神賑いの中、沖・中両宮秋季大祭は無事盛大裡に終了した。

余滴

「若い人」と題された偉人の随想を読んだ、昭和三十一年九月に記された文章である。終戦後の混乱が続いている大変な時代に書かれた文でありながら、現代に一番大切な道を示す文章と思う。日本民族に対する確固たる信頼感にあふれていて、ひさしぶりに心が洗われた気持ちで読んだ。

『終戦後、青年の悪口を言うことが流行の一つとなっている。例外は別として青年には誠に気の毒である。言う方が冷静に自らを顧みるべきである。

青年は立派である。素質は良い。この青年を持つわが国の前途は明るい。

私は抽象的議論は嫌いだ、私は終戦後の青年に直面接触した体験から出た信念でそう言うのである。

初めて戦いに敗れた日本人は必要以上に腰を抜かした。僅か十年を経過した今日から当時の世相を見てどう思うか。

ことに教育、言論、政治の各界の慌て方は深刻であった。こう言う国民であったがゆえに、軍人はなすべからざる戦争を企て、国民はいたずらに迎合してこれを止める度胸に欠けていた。何れも野心と私利私欲の生んだものであり、国を思う真心に欠けていたからである。

われらの祖先と根本的に違っている点であり、お恥ずかしいことである』……

この随想は「日本青年への期待」で始まり「信頼するに足る日本青年」で結んである。今、心しづかに反省し偉人の心を学びたい。

第四三七回 宗像大社歌会詠草

大野展男 選

毎月末日〆切

名古屋　小田　留子
幾百の新車を乗せていづる船かつて戦艦征きし港を

（評）一つあやまれば経済戦争となりかねない大量の車の輸出港はかつての武力戦争の基地でもあった。作者は現実だけを述べているが、鋭くて骨太の一首。

久原　武藤千加子
岸に立つ吾に寄り来る鯉のむれ静けき池にざわめきたて

（評）「ざわめきたてて」で、人に馴れ切った池の鯉の動きをうまく描写している。木々にかこまれた大社の池を想像させる。

福間　池浦千鶴子
枝先きに桜のもみぢ葉点々と見えてひそかに秋は来てをり

（評）枝先の数枚の桜もみぢに季節の推移を感じた作者。素直なしらべが内容とうまく合っている。

日の里　石松　知子
散策にいづべの道を歩みしや夫は野の花摘みて帰り来

（評）一人で散策に出る夫にひそかな妬みを感じながら、野の花を摘んでくる優しい行為をほほえましく見守っている作者である。小田さん達と同じく弘次氏との夫婦歌人、頑張って下さい。

宗像　藤井　浩子
高速を走る車の吾が視野を下降の一機がひかりてよぎる

名古屋　小田　喜一
すさまじき事故の映像告げしあとテレビは見馴れしCM挿む

鐘崎　安永　久子
冷蔵庫に糠床あずけ出雲へと残暑厳しき朝を旅立つ

田野　森　甲子
苺ハウスにビニールかければ夫とゆく苺の手入れは老いの仕事と

田久　井上　光
釣川の春に朝ごと犬連れし老見ぬままに夏が過ぎたり

日の里　石松　弘次
夕陽背に歩くわが影田に映りまさしく分身急げば急ぐ

庄内　原田　衛
それぞれに病持ちても集りて思い出話尽きることなし

曲　天野　玲子
釣川のほとり歩めば秋深し尾花の穂絮は風に乱るる

武丸　中村さつき
退職の記念としたる金木犀今咲き盛り其の人恋ひし

福間　中村　勇
御詠歌の一つも知らず杖つきて秋の村々遍路をつづく

粕屋　岩男　亘
から若さには勝てぬ老化と今日は知る秋の九重の山登りつつ

原町　八波　五月
一生かけ我が求めし家具の類泊る客なし膳据ゑるなし

八幡西　吉瀬ヤス子
車窓より眺める山里秋めきてすすきの穂群光りそよげり

津屋崎　佐々木和彦
いくたびも枕灯をつけ書きとめし短歌にあれど今ひとつなり

田野　森　つるの
けふの宿海近きらし建ち並ぶ冷凍倉庫は社名を記す

自由ヶ丘　細川　絅子
喜寿近き年の証しか我が髪の薄くなりたりいとおしみ梳く

光ヶ丘　藤原みさを
鉢植ゑの紅きリンゴの珍らしく社の市に夫と見てをり

福間　二宮　末子
鎌をとぐ農夫の姿今はなくエンジン音ただびびくのみ

日の里　大和美由紀
哀話を秘む濡衣塚に来て見れば落ちし銀杏は掃き寄せてあり

徳重　石松ヤス子
御祭典の花火あがれば身を正し宮に向ひて柏手を打つ

八幡西　有吉　陽子
亡き夫の想ひを胸に巡礼に旅立つ友の姿尊し

吉留　高山　信子
伝道五十年われらは天孫民族と叫びやまざりし師の五十回忌

光岡　河村　久光
秋冷の朝日を受けて体操するグランドを見つめ吾はペン置く

土穴　瀧口　敦子
白鷺の等間隔に列なして日暮に城山の屋根をとびゆく

池田　小田　イセ
見上ぐれば石段登る遍路等の白衣の背は後光差しをり

大島　越智　治子
空澄みて御座船守る七浦の漁船は旗をなびかせ進む

福間　井上かつみ
創作に励みし跡を示さんと寸暇おしみて竹箒を編む

城南ヶ丘　中間日出子
背伸びぬと嘆きし孫にチラシもち訪ねし母も小さくなりぬ

鐘崎　安永　久子
八十に近き夫は日に幾度電動椅子に身をほぐしをり

施行された臓器移植法

生命倫理や患者の人権などをめぐってさまざまな論議を巻き起こしつつ成立したいはゆる臓器移植法が、この十月十六日に施行され、わが国でも脳死者から提供された臓器による移植医療が本格的に開始されることとなった。

国内では、これまでも「角膜及び肝臓の移植に関する法律」（昭和五十四年）のもとで一部の臓器移植がおこなはれてゐた。しかし肝心の心臓、肝臓については、日本で最初の心臓移植手術をおこなった札幌医大の和田寿郎教授に対する訴訟事件や医者を告発する事件が相つぎ、移植医療に対する国民の根強い不信が存在して、ほぼ三十年間にわたり、わが国では見送られてきた。

心臓死に代へて脳死を法的に人の死と認め、あらゆる臓器の移植手術を可能ならしめる法案は、三年前にも国会に出されたが廃案となり、さきの通常国会に再度議員立法として提案され、妥協修正の末「臓器の移植に関する法律」として、他の法律と一本化されてやうやく成立をみたものであった。

○

すでに民間団体の意思表示カード普及委員会によってテレフォンカード大の「臓器意思表示カード」も作られ、臓器提供者（ドナー）の確保活動が開始されてゐる。そのカードを見ると、次のやうな記載が目に入る。

1、私は、脳死の判定に従ひ、脳死後、移植の為に○で囲んだ臓器を提供します（×をつけた臓器は提供しません）。心臓・肝臓・肺・膵臓・腎臓・その他（　）

2、私は、心臓が停止した死後、移植の為に○で囲んだ臓器を提供します。（×をつけた臓器は提供しません）。肝臓・膵臓・肺・角膜・その他（　）

3、私は、臓器を提供しません。

以上三つの選択肢から自分が望む該当番号を、そして提供の意思ある場合はその臓器を○で囲む方式をとってゐる。さらに本人署名（自筆）と家族署名（自筆）の双方の欄が設けられている。はたしてこのカードを手渡された読者は、どの番号に○をつけるであらうか。

これは提供意思ある者のみがアイ・バンク、腎バンクに登録する「ドナー・カード」方式とは全く異なってゐる。本人が常時携帯してゐることを前提に、臓器提供を拒否する意思表示まで求める内容となってゐる。このやうなスタイルを採らざるをえなくなったのには、今回の法律が「人の死」に対して「心臓死」と「脳死」の二つの死を認めることになったこと、また脳死者から臓器摘出については、とくに本人の事前の書面による脳死判定に従ふ意思表示と、臓器の提供の意思表示の両方を必要とし、さらにその双方につき家族の同意をも必要とするといふ非常に厳しい条件をつけたことにもとづく。

ここに今回の臓器移植法の大きな問題点が存する。

○

当初、立法化に熱心な移植医や医系議員たちは、法律でもって一率に脳死を死と位置づけ、それによって臓器確保も容易にしたいとの魂胆から、移植法の性格を「脳死法」と「臓器確保法」としたい考へが強かった。しかし、人の死を国会議員によって一義的に法定化するやり方に国民世論の反撥は強く、議員たちも迷って多くが態度を決めかねた。その結果最後は妥協の産物として、死期の相異なる二つの死を認めてしまひ、その上二重の厳格な意思表示の条件を付加したことで結果的には、臓器確保は当初考へてゐたより、はるかに厳しいものとなった。それは決して賢明なやり方ではなかった。

筆者は、端的に言って、脳死を法律でもって人の死とはせず、移植法の性格は、あくまで善意の提供者の意思を尊重する「臓器提供法」とすべきであったと考へる。

そもそも臓器移植術を立法化する目的は、移植医が殺人罪などで告発されることなく脳死者からの心臓や肝臓の摘出をおこなへるやうにすることであった。それならば、医者のおこなふ脳死者からの臓器摘出行為に業務上の正当性を認める、法的にいへばいはゆる刑法上の違法性阻却事由を与へればよいわけである。そしてそれは事前の「本人の同意」で足りるはずである。

すなはち、もし自分が蘇生不可能な「脳死」と判定された時には、その時点で本人は自己の死と認め、臓器提供意思にもとづく臓器摘出に同意する旨の明確な意思表示がありさへすればよい。法律は、その善意の臓器提供者の意思を実現する条件を明示すれば済む。現に諸外国においても、移植法はあっても、あへて脳死を法で死とせず、医学界の責任においてその定義と判定方法を確立した国も少なくない。その方がわが国の国民感情からいってもふさはしいものといへるのではないか。

○

今回の法律は、これらの問題性を認めて三年後に見直すことを規定した。何人かの実際の移植例が出てくれば、また予期せぬいろいろな問題も生じてくるであらう。

いづれにせよこの臓器移植は、われわれ一人一人の生命観と身体観、民族の死生観や宗教観とも深く通底する問題である。これからも関心をもって見守っていきたい。

（神社新報）

秋季 奉納剣道大会

宗像では、秋になると奉納の野試合が多くなる。九月の宮地嶽神社、十月の生目神社、そして十一月の宗像大社の三大大会である。

当社の奉納試合は、男女とも小学生から大学生まで参加でき、出場者も年々少なくなったとはいえ、今年も四百五十名が参加した。

今年から剣道を始めた小学一年生は、宗像大社秋季奉納剣道大会がデビュー戦で、どこの教室も立派な試合が出来る様、特に礼儀を厳しく指導はしているが、いざ試合当日になると、出場選手と観客の多さに圧倒され、日頃はちゃんとできる礼も声も忘れた子供もいた。

又、豆剣士には、自分の背丈ほどもある竹刀を思いのままに扱うには稽古不足の様で、まして体育館の床とは勝手が違い、足さばきもおぼつかず、よろける度に隙だらけの構えになり、応援団から大喚声が上がった。

朝九時から始まった奉納試合も、今年は試合中断がなかった為、例年より早く終了した。

今年の試合結果は次の通りです。

小学生男子

一年の部
優　勝　武石耕平（池野）
準優勝　原田龍太郎（池野）
第三位　花田隆寿（池野）

二年の部
優　勝　江田一生（河東）
準優勝　坂田竜人（神興）
第三位　真田一輝（自由ヶ丘）

三年の部
優　勝　松田優馬（東部）
準優勝　今永真澄（自由ヶ丘）
第三位　小樋和成（東郷）

四年の部
優　勝　赤星仁司（東部）
準優勝　衛藤真二（津屋崎）
第三位　矢ヶ部雅史（自由ヶ丘）

五年の部
優　勝　生田圭一（玄海）
準優勝　西山晃平（東部）
第三位　長崎博旭（自由ヶ丘）

六年の部
優　勝　久保田毅（自由ヶ丘）
準優勝　森下健士（岬）
第三位　瀧下靖浩（赤間西）

中学生男子

一年の部
優　勝　神多宣彰（城山）
準優勝　柴田祐哉（中央）
第三位　間地毅司（日の里）

二年の部
優　勝　中村匠志（中央）
準優勝　伊藤理一郎（中央）
第三位　吉田賢次（中央）

高校・大学の部

優　勝　溝上直也（福大附）
準優勝　魚住　宏（福大附）
第三位　安部　豊（福大附）

小学生女子

一・二年の部
優　勝　河野千恵美（河東）
準優勝　小樋田理絵（東郷）
第三位　谷口裕美（南郷）

三・四年の部
優　勝　久田優衣（玄海）
準優勝　松井奈美（津屋崎）
第三位　鈴木綾香（玄海）

五・六年の部
優　勝　伊藤瀬里加（河東）
準優勝　広田久美子（岬）
第三位　福田直子（玄海）

中学生女子

優　勝　域野朋子（中央）
準優勝　福田丞子（玄海）
第三位　嶋田　茜（勝浦）

高校・大学の部

優　勝　今村美紀（福大附）
準優勝　大井智代（福大附）
第三位　峰　仁美（福大附）

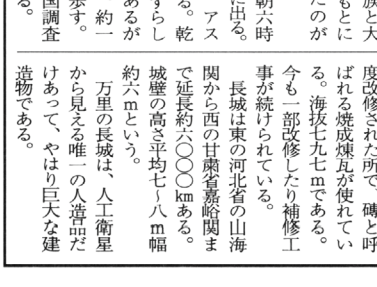
第二十三回宗像大社 秋季奉納吟剣詩舞道大会

第二十三回宗像大社秋季奉納吟剣詩舞道大会が、境内に三千鉢の菊花が咲き誇る十一月三日、明治節の佳日に約百名の参加者のもと清明殿に於て開催された。

当日は秋晴れに恵まれ、地元宗像地区の吟愛好家で組織される清香吟者宝山会の方々が日頃鍛練した自慢の喉を、今日の檜舞台に披露しようと参集、午前十一時半より会員一同正式参拝続いて清香吟社会長益中鵬山先生の格調高い吟と、鶯国流剣琳館館長福家鶯玉先生の華麗な剣舞とが奉納された。更に宝山会会員全員にて合吟を披露、迫力ある吟が境内に響き渡り、参拝者もしばし足を止めて聞き入っていた。

午後より今大会のメインである構成吟「吉田松陰」を清明殿にて披露、熱のこもった剣舞が観客を幕末の世界に誘っていた。

大会もクライマックスの師範の先生方の洗練された吟や剣舞が奉納されると、参加者一同日本の伝統文化の素晴らしさに深い感銘を受けている様子であった。



今大会も会員の皆さんの熱意溢れる奉納で、日本の心がいきいきと表現され、この大会の一層の飛躍を誓い合いながら午後四時幕を閉じた。

今回も永年の奉納と斯道の興隆に貢献された方々に表彰状が贈呈された。

表彰者は次の通り

上林（かばやし）　紘月（こうげつ）
藤井（ふじい）　大山（だいざん）
倉永（くらなが）　倉月（そうげつ）

以上

一誌一話 (64) 中国調査紀行 (27)

樂　岑　子

重ねて何度も云うようだが、「敦煌」は天山北路・天山南路とタクラマカン砂漠を間にした昆崙（こんろん）山脈の山麓を、永い年月西へ東へと行く旅人等が踏み固め、重ね上げて造ってきた、文化の逐商の道「シルクロード」が交差する所、交易の場である。水が湧き出る砂漠のオアシスでもあるここでは、水を求める人々が休息し、憩の場を築づき上げて出きた砂漠の中に作られた都でもある。

この地にローマを主体とするヨーロッパの文化や、中近東のイスラス文化が、またインドの仏教文化が、キルギス草原・パミール高原・シベリアの南部にあたるカスピ海の東側海岸などが囲む中央アジアで混り合い。

この混合文化に新らしく、中央アジアの遊牧の民・騎馬民族の文化がさらに加わり、十重二十重に混りあった再度の混合文化が、新規の別文化として別個にタクラマカンを通って中国へと入ってきている。

中国の古来の文化や各地域の独自の文化だけでなく、混成されて新しく出来た複合文化が、多数の民族と大勢の人々の賑わいのもとに開花し、隆盛をみたのが「敦煌文化」である。

八月十七日（水）朝六時三十分に目がさめ外に出る。夜間に雨が降ったか、アスファルトが濡れている。乾期に雨とはやはりめずらしい。やや曇り空ではあるが本日も晴れて暖そう。約一時間天安門広場を散歩す。

今日が今回の「中国調査紀行」最后の日である。

今日は「明代十三陵」と「万里の長城」の散策とする。

北京はやはり大都市だけあって朝七時頃から街中は大混雑である。九時十五分友誼賓館を出発するが目の前のラッシュやまず。北京から十三陵の入り口昌平まで23kmをのろのろと行く、約一時間半かかって到着した。

十三陵は明代の皇帝十三人とその皇后達の陵墓で、北京西北郊外の山裾に連なる。古くは入り口に城門があり、周囲40kmを城壁で取り囲んでいたという。陵墓地入り口の楼門を通り過ぎると、参道には権力の象徴であるように、象・馬・駱蛇・文官・武官の巨大な石像が並び立っている。

十三陵を出て昌平友誼工芸美術商店という工房と商店とが入いる商工会館風の所での陶工房を見学し内のレストランで中食もとる。

昼からいよいよ「万里の長城」である。

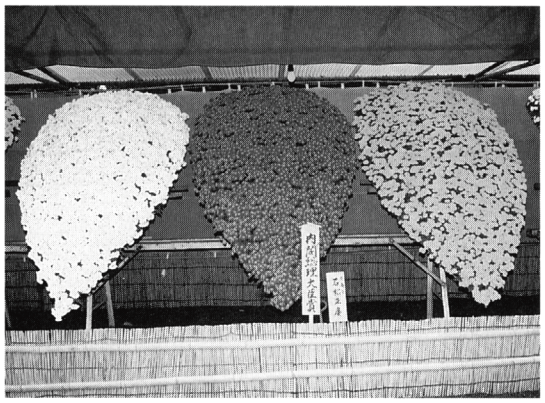
万里の長城に行く、北京郊外の「八達嶺」と呼ばれて一番観光客が多い所に行く。北京の観光地としても有名な所である。明代の一度改修された所で、磚と呼ばれる焼成煉瓦が使れている。海抜七九七mである。今も一部改修したり補修工事が続けられている。

長城は東の河北省の山海関から西の甘粛省嘉峪関まで延長約六〇〇〇kmある。城壁の高さ平均七～八m幅約六mという。

万里の長城は、人工衛星から見える唯一の人造品だけあって、やはり巨大な建造物である。

第二十七回 西日本菊花大会

内閣総理大臣賞に 懸崖部門 石松 正廣氏（福岡市南区）



宗像の秋を飾る当大社の神賑行事として行われている、西日本最大の菊花展西日本菊花大会（主催：宗像大社菊花会、後援：福岡県他）も、本年で二十七年目を迎え、十月三十日より十一月二十三迄当大社特設会場において盛大に開催されている。

本大会開催に当たり、十月十九日・二十日の両日に宗像地区商工会青年部と菊花会役員並同有志、宗像菊友会々員の奉仕により、展示用ハウス一〇〇余棟が特設された。

二十六日には、福岡・佐賀・長崎・宮崎・鹿児島・北九州・遠賀・宗像各地の協賛会社より提供されたトラック六十数台で、九州・山口各県の菊花愛好家が丹精込めた菊花三〇〇〇余鉢が搬入され、宗像青年会議所会員の奉仕により菊花の荷下ろし、作業が行われた。

展示ハウスを埋め尽くした菊花は、錦秋の陽光を浴び、深緑の御社頭に馥郁たる香りを漂わせている。

十月三十日、午前十一時より奉納菊花展奉告祭が本殿にて斎行され、審査長以下審査員、高田太助会長を始め会員一同参列し開会を祝した。

開会式に前後して審査会が行われた。

審査会は真鍋尚義福岡県農業総合試験場園芸研究所花卉部長を審査長に、同所谷川孝弘花卉花木室長、松井洋主任技師、國武利浩主任技師、樋口茂四郎県花卉専門技術員、吉田徹生福岡県花卉園芸組合連合会顧問、田中一男宗像大社奉納盆栽会顧問各氏を審査員として、公平かつ厳正な審査が終日行われ、各部門別に順位が決定した。

又十一月八日には平成十一年開催する全国大会、世界大会に向け、第二回切り花・福助・盆栽一鉢競技大会を開催、当日持ち込み、即日審査が行われた。審査は高島雪茂㈳全日本菊花連盟宗像大社支部長を審査長として九州各地の全菊連公認指導員、同公認審査員二十二名にて行われ別記の通り入賞が確定した。

尚各賞の受賞者は次の通りである。

内閣総理大臣賞
懸崖部門
石松　正廣　福岡市南区

農林水産大臣賞
大輪部門
山口　義實　八幡西区

文部大臣賞
盆栽部門
呉屋　太雪　小倉南区

通商産業大臣賞
特作部門（古木添木作り）
櫻木　為生　田川市糒

運輸大臣賞
特作部門（一文字菊花壇）
船越　順一　大野城市

厚生大臣賞
特作部門（福助特別競技）
田中　祐成　佐世保市

自治大臣賞
特作部門（総合花壇）
三口　澄夫　宗像市日の里

建設大臣賞
特作部門（小品盆栽）
早川　馨　八幡西区

内閣官房長官賞
懸崖部門
浜田　成男　粕屋郡粕屋町

科学技術庁長官賞
大輪部門
時田　義光　佐賀県鳥栖市

環境庁長官賞
盆栽部門
高島　雪茂　遠賀郡遠賀町

大会大賞
特作部門（自由花壇）
高田　太助　八幡西区的場

宗像大社宮司賞
宮地隆治（武雄市）池田昭（八幡西区）浜田豊子（粕屋郡）本田國雄（遠賀郡）綱脇倉子（宗像郡）一世勝幸（佐世保市）

九州農政局長賞
石橋　善治（城南区）

福岡県知事賞
藤正邦（粕屋郡）松尾常喜（大野城市）伊藤年春（遠賀郡）大穂正義（城南区）

佐賀県知事賞
鎮守　成明（鳥栖市）

熊本県知事賞
園田　秋博（宇土市）

長崎県知事賞
堤　勇孝（佐世保市）

福岡県議会議長賞
三浦　鶴雄（大牟田）高椋良和（遠賀郡）北尾忠（小倉南区）末次勝記（若松区）

福岡県町村会長賞
渡辺道（直方市）田中康道（直方市）梶原崇光（若松市）吉田耶（宗像郡）

福岡県町村議会議長会会長賞
石田御年（古賀市）成田カオル（遠賀郡）坪根弥一（小倉南区）千々和正信（八幡西区）

福岡県教育委員会賞
千々和正信（八幡西区）稲永豊（粕屋郡）田中和夫（遠賀郡）清水英一（直方市）

全日本菊花連盟賞
船越順一、西山時秋

九州・山口花卉園芸連絡協議会会長賞
木下みつ子、阿久根力、高取悟、馬場園馨

九州花卉卸売市場連合会会長賞
池口盛信、倉田征喜、家宇治規、籾井弘巳

福岡県農業協同組合中央会会長賞
深川年洋、清崎春美、山崎巌、三口清子

福岡県観光連盟会長賞
石田俊延、妹川尚生、中尾利夫、浜田豊子

福岡県農林事務所賞
石丸五年、吉住萬吉、永田ツルミ、石原睦男

福岡商工会議所賞
寺島隆生

福岡県中小企業経営者協議会会長賞
永田ツルミ、吉田吉松、宗像市学習ネットワーク、山咲充男

福岡県高齢者能力活用センター賞
石田進、池上福元、中尾利夫、野口史

九州旅客鉄道㈱賞
高山勉、大穂正義

福岡県花卉園芸連合会会長賞
許斐保、長井市雄、時田義光、徳永信子

福岡県花卉市場協議会会長賞
原聡、木村正明、栗田義信、園田秋博

粕屋郡町長会長賞
下村運、竹内雪豊

遠賀郡町長会長賞
大野昇、石田桂子

宗像郡町村長会会長賞
生武静男、田代定、金子黄顕、最所勝実、大坪常憲、木下久也

福岡県町村議会議長会会長賞
穴井利之、陣内重義、浜田成男、最所孝子

宗像郡町村議会議長会会長賞
要博文、永島文男

遠賀郡町長賞
芦屋町長賞
山根正雄、古波蔵正忠

水巻町長賞
山崎巌、宮地隆治

古賀市長賞
大森忠夫、馬場正晴

津屋崎町長賞
安藤達男、鎮守成明

福間町長賞
高山健次、山領松行

玄海町長賞
安永儀三郎、今村忠文、栗田義信、石原一夫、境正、堀川栄

大島村長賞
伏貫喜久雄、坂本生記

玄海町観光協会賞
池口盛信、本山国利、綱脇倉子、山口義實

宗像大社菊花会長賞
森山敬二、毛利勇夫、安藤輝正

遠賀郡農業協同組合長賞
三口澄夫、竹内雪豊

宗像農業協同組合長賞
山下尚義、堀川栄、倉田征喜、宗像菊友会

津屋崎町商工会長賞
安藤輝正

宗像市商工会長賞
木下之也

福間町商工会長賞
竹下次男

玄海町商工会長賞
斉木助

大島村商工会長賞
田畑実志

宗像大社氏子会長賞
清水英一、岩下宗則、山本義雄

玄洋福岡ライオンズクラブ賞
末次勝記、阿久根力、福添利治、鈴木輝夫

神湊旅館組合長賞
松内英明、陣内重義、石橋義治、寺島隆生

宗像青年会議所賞
寺下政國、藤田亨、田畑実志、徳永信子

宗像地区商工会青年部長賞
橋上能和、加藤重喜、妹川尚生、山下尚義

中原ガーデン賞
平山俊美、見崎久義、松尾勇、波多野松男

サカタのタネ賞
下田一義、本山国利

グリーンキング賞
金子黄顕、堤勇孝

グリーンソフト賞
日高信、三口清子

ヨシカネ特別賞
松尾勇、高椋良和、古波蔵正忠

入選
山本義雄他七名
「第二回切り花、福助、盆栽一鉢競技受賞者」

宗像大社賞
池田昭、宮地隆治、高島雪茂

宗像郡町村長会長賞
園田秋博、園田秋博

玄海町町長賞
池田昭、境正

宗像大社菊花会長賞
山口義實、瀬里士雄、阿久根力、古波蔵正忠、呉屋太雪

門司菊友会会長賞
松内英明

若松菊友会会長賞
宮地イツ子

小倉菊花会会長賞
松内英明

北九州菊花芸術協会長賞
船越順一

八幡南部秋芳会会長賞
呉屋太雪

八幡西部秋芳会会長賞
木下六也

芳栄会会長賞
古波蔵正忠

水巻郡菊花会会長賞
阿久根力

宗像菊友会会長賞
西山時秋

菊寿会賞
馬場正晴

鳥栖菊花会会長賞
田中祐成

武雄愛菊会会長賞
井手梅作

宮崎県菊花協会会長賞
古野本武夫

佐世保菊友会会長賞
山口義實

自然流国芳会会長賞
高原良和

自然流国芳会家元賞
関本和代

宇土市菊花会会長賞
立川健吉

佐世保菊花会会長賞
宮地隆治

㈳全菊連宗像大社支部長賞
西山時秋

㈳全菊連九州西部支部長賞
高島雪茂

㈳全菊連国芳会支部長賞
馬場正晴

㈳全菊連熊本県支部長賞
竹内雪豊

宗像大社菊花会理事長賞
成田カオル

宗像大社菊花会事務局長賞
宮地イツ子

宗像菊友会事務局長賞
池上福元

入選
赤迫博　他五十七名

本大会最高齢出品者賞
明治三十八年生満九十二歳
渡辺道（直方市）

古式祭のご案内

古式祭とは、今年最後の収穫感謝祭のことです。氏神様へ一年間の神恩を感謝して今年の収穫物を捧げ、忌火で炊いた御飯をお供えし、氏子の人達が一緒にいただく神事です。

この神事は、宮中に於て陛下が神嘉殿にて新嘗祭を行われておられるのと同じ性質のものです。

この古式祭は又「延命招福」の集いともいわれますが、氏神様と共にこの一年間の喜びを分かちあうといった「神人和楽」を共にする、年に一度の集会であることに意味があります。

八百年以上の伝統をもつ宗像大社の古式祭には、特にお菓子と呼ばれる、九年母、菱餅等で作られた特殊神饌や、江口の浜よりあがるゲバサモという海藻をお供えして、お座を催すのが古来からのしきたりです。又くじが行われ、翁面・御神盃などが授与されます。

記

一、日　時　十二月十四日（日曜日）
祭典　午前六時
お座　午前六時三〇分～午前九時

一、場　所　祭典　本殿　お座　清明殿

一、お座料（一名分）金壱千円

社務日誌抄

十月一日～三日　宗像大社秋季大祭
十月一日　SKK九州安全推進部十名参拝　宗像地区消防本部並宗像地区消防連絡協議会十五名参拝
十月二日　宗像護国神社秋季大祭
十月三日　宗像大社菊花会事務局長賞
出光興産㈱副社長出光昭氏並ベトロ・ビジネスサービス㈱社長勝谷保氏他四名参拝
福岡県護国神社宮司荒木田泰久氏、伊豆県議会議員、和田玄海町長等参拝
十月五日　縫殿神社祭
十月六日　宗像四国巡拝団七〇名参拝
福岡銀行宗像支店次長村上義高氏転任挨拶の為来社
十月七日　神郡宗像薪能実行委員会十名参拝採火式斎行
十月九日　全国浴槽事業担当者会議四十七名来社
十月十五日　月次祭
十月十六日　沖・中両宮秋季大祭
出光美術館事業課長阿久井長則氏他五名
献茶祭準備の為来社
十月十七日　献茶祭
表千家家元代理久田宗也宗匠奉仕　出光興産㈱会長出光昭介氏他関係者、表千家福岡同門会役員等参列
十月十九日　宗像地区商工会青年部七〇名菊花展示ハウス設置作業奉仕
玄海町消防団秋季大祭警備反省会
十月二十日　宗像大社菊花会役員及宗像菊友会六十五名菊花展示ハウス準備作業奉仕
十月二十一日　SKK物流船舶安全協力会会長小田富治氏他十四名参拝
十月二十三日　崇敬者横浜市加藤貞三夫妻参拝
十月二十六日　宗像神恩会佐分けい子氏他十四名参拝
西日本菊花大会菊花搬入・㈳宗像青年会議所奉仕
十月二十日　第二十七回西日本菊花大会開催（十一月二十三日迄）
十月二十一日　沖・中両宮翼賛会会長丸井房芳氏他七名参拝

宗像大社歌会
俳句作品集（四一五）

福　間　森　清

鵯高音樹上見上げし投句の日

自由ヶ丘　城戸　晴弥

人形師皆村人や秋祭

若　松　髙橋　忠實

こほろぎに鳴かれて秋の夜長かな

自由ヶ丘　細川　絹子

松の枝にすこしかかりて十三夜

日の里　花田いつ枝

旅土産軽し厨にバッタ跳ね

小　笹　山下しづえ

一、二才児に遊戯おしえし木星下

自由ヶ丘　城戸　晴弥

着飾りし子に母せかれ七五三

東　郷　吉武　湧泉

無事な身をもてはやさるる敬老日

東　郷　中野　きみ

秋刀魚たぶ今が倖せかもしれず

東　郷　吉田　矜子

机にひろぐノートは真白雁渡る

東　郷　吉田　杳子

一湾を抱きし丘や草紅葉

東　郷　三浦三千代

逝く秋の影を重ねて遍路道

東　郷　有吉亜紀子

お接待頂き拝む秋遍路

東　郷　田中　雨葉

粧ふ山一湖の深さ包みけり

東　郷　木原　房子

背山路や草に交じりて藤袴

藤　沢　井上　玄洋

穂すすきの遠く波うつ峠道

（続）浜の寄物 122

いしいただし

漂流・漂着 二

十月の半ばに九州大学名誉教授の中村正夫先生から、九州大学の小林茂先生達によって「漂流・漂着からみた環東シナ海の国際交流」というのが九州大学大学院比較社会文化研究科から出たので、君の分までもらうようにしたというお電話をいただいた。数日後小林先生から報告書が送られてきた。

文部省科学研究費補助金を得ての研究成果報告書である。被我の文献より漂流・漂着が克明に記録され、貴重な研究成果である。

同報告書の目次を追うと、まず研究概要が述べられ、次に佐伯弘次、宗家文書漂流関係資料目録。池内敏、対馬藩政史料の朝鮮人漂着関係史料について。小林茂・松原孝俊、朝鮮から琉球へ、琉球から朝鮮への漂流年表。真栄平房昭、海域史研究からみた琉球・五島遠隔地交易をめぐる予備的考察。木部和昭、『長崎志続編』漂着朝鮮人送還年表・解題。木部和昭、近世期長門における朝鮮人漂着年表および解題。松原孝俊・豊見山和行『憲章姓家譜』解読および解題。木部和昭・松原孝俊、松原新右衛門『朝鮮物語』解読および解題・からなっている。

漂着の多い長門海岸（ほとんど韓国製）

題名が示すように「環東シナ海をとりまく国際交流」で朝鮮、対馬、五島、山陰（長門）等の漂着記録である。研究の目的を次のように述べられている。「歴史時代に発生した漂流・漂着は、多分に偶然性に支配されるものと考えられ、それに関する記録も、歴史学では周辺的なものとして位置づけられ、漂流者のたどった数奇な運命や、彼らが見聞した珍奇な海外の風俗習慣に対して関心が寄せられるだけであった。しかしながら、多数の漂流に関する記録をあつめてみると、そこから、他の資料ではうかがい知れない地域間の交流や国際交流がうかびあがってくる。たびかさなる漂流の時期を検討することにより、航海や遭難の季節性、さらには季節風との関係があきらかになる（中略）漂流は民衆レベルでの国際交流であり、これを通じた海外情報の流布といった側面にくわえ、文化の伝播の可能性も秘めている。本研究は、以上のような漂流・漂着について、環東シナ海を例として、国内資料を収集するとともに、これに学際的・組織的検討をくわえることにより、先史時代・歴史時代の地域間交流や国際交流をあきらかにすることを目的とする」と。

同報告書の中から『長崎志続編』漂着朝鮮人送還年表・解題の中に別表としてまとめられている藩領域別朝鮮人漂着件数をあげさせていただく。この記録は文化十年（一八一三）から嘉永五年（一八五二）の三九年間である。漂着藩では東シナ海に面した五島が圧倒的に多い。次いで平戸、長州の順である。次回では長門での朝鮮人漂着年表をあげるが、これは正保元年（一六四四）から明治三年（一八七〇）で一七八年間のうち一八五件の漂着があっている。

※この冒頭で書いた中村正夫先生は十一月十三日急逝されました。七四歳、農村社会学の権威として福岡部落史研究会創立にも参画、また、地域にあっては宗像市史、福間町史、津屋崎町史、新宮町誌等宗像、粕屋郡誌にまたがる多くの市町史（誌）編纂委員長として編纂執筆にあたられました。ここに慎んでご冥福を祈ります。

（1813—1852）

漂着藩	件数	人数	死者
長州	16	135	2
長府	5	48	0
五島	40	330	3
平戸	18	179	1
福岡	9	99	0
浜田	9	97	0
松江	6	56	0
薩摩	5	50	11
壱岐天領	3	27	0
石見天領	3	16	1
鳥取	2	19	2
丹後天領	2	14	1
唐津	2	13	0
津和野	1	14	0
出石	1	2	0
宮津	1	1	1
総計	123	1100	22

漂流・漂着からみた環東シナ海の国際交流より

青柳種信著 平野国臣写 瀛津島防人日記（上巻ノ六）

〝いつしかも
見むとおもひし
むなかたの
沖つ御島を
見るがともしき〟

中津宮にまゐりて、海の原安けく平けく、船泊しめ玉へとのみ（祈）奉り、御前よりまか（罷）るときに、

〝天の川川霧たちて
剣たち宗像の神の
むかしおもほゆ〟

また、

〝むなかたにいつ（斎）く祝部のゆらたすき（木綿襷）
かくるもかしこ
神のむかしを〟

三日（四月）。猶同じところなり。沖つしまの神づかさ河野ぬしがもとより、来べきよしいひおこせたり。打つれてゆく。酔しれて、日の暮るをもしらず遊ぶ。

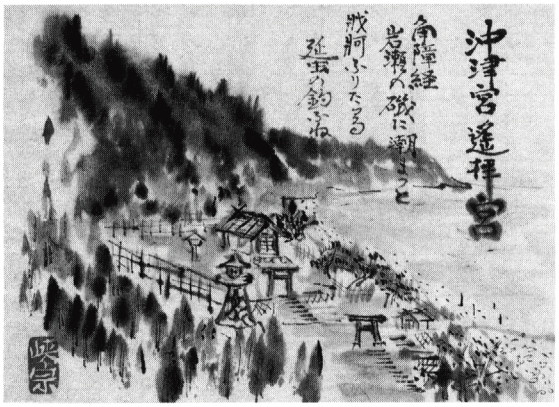
四日（四月）。風波やむべくもあらず。いつか沖つしまには渡りぬべき、とのみいひあへり。浪のたつを見てよめるうた、

〝桙弓はるは
くれしをわたつみの
かざし（挿頭）の花は
いとど咲（そう）〟
とぞいへりける。

五日（四月）。浪風静なれば、船出せよ、といへど、柁取遙なる舟路にあれば、追手のおりずは、いかで漕あへん、といふに、人々いたづらに海原をながめつゝぞある。

はかばかしくもの語ふべき人もなければ、いと侘しくて、日々に、山にのぼり、磯に出つゝ、同じ所をとほる。沖津みやの遙宮にまゐりて、

〝角障経（つのさはふ）岩瀬の磯に
潮まつと
戕舸（かし）ふりたつる
蜑（あま）の釣ふね〟



※戕舸＝舟をつなぐため水中に立てる杭※

けふは、いとよく晴わたりて、沖つしま見ゆ。

六日（四月）。けふも船出さず。

七日（四月）。おなじところなり。浜に出て、あびき（網引）するを見る。

八日（四月）。追手なれど、浪高しとて船出さず。かゝるをりにや、むかし、貫之ぬしの土佐へくだりしわ（童）らはの、海つ路にて

〝立てばたち
ゐれば又ゐる吹風と
浪とはおもふ
どち（仲間）にや
有らん〟
とよめりしもおもひ出られたり。

故郷の神々 (35)

露天祭祀に供えられた品々

〈滑石製形代類〉

露天祭祀の一号祭場には、形代類の中でも舟形が特に多量に奉献されている。この時期は丁度大和朝廷が大変な国家事業として続けていた、対中国交流の遣唐使の派遣である。沖ノ島での航海安全の祭りはいよいよ栄えに行われていたことであろう。

前号でも述べていたように、遣唐使船が順調な船旅で往来できたのは、全派遣回数の約半分程の回数であった。

当時としては船を造る作業は一大難事であったろうが、遣唐使船は大和朝廷が日本の最大の技術と労力とを屈指して建造した大型の構造船である。舷は高く造られ、この高い所より左右に数十本もの長いオール型の櫓を突き出して漕ぐ、大形の手漕ぎ帆船である。この船を四隻で編成していたのが遣唐使船団である。

船団を組んだ遣唐使船は、難波を船出し瀬戸内海を抜け、沖ノ島を航路標識（古代に於ける灯台の役割をも努めている）として見ながら、玄界灘を黄海をと渡って行く＝北方路、玄界灘・東支那海と渡って行く＝南路・南島路とがある。何れも対馬暖流の流れに棹指した荒海の渡りである。

最新の技術を使っての船造りであったが、或いは波に掬れ難破し、或いは流されて、成功を修めた船は半数程であったことは、いかに船旅が天候に左右される一大難事であったかが理解出来るであろう。

唐時代の中国は、古代からの大陸横断路シルクロードによって、永い年月費らすことなく次々と入ってきた西の文化が自国の文化と混り合い、新しい中国文化として華やいだ唐文化を満開にした頃である。この文化を吸収し、新世紀の文化最新の技術の大和文化を作り出す為に、遣唐大使と一緒に多くの留学生・留学僧を派遣し続けたのである。

我が国の神への信仰というか、祭祀（まつり）が起った原点はやはり、自然物と自然現象に対する畏敬の念からである。

なかでも形代類（人形・馬形・舟形）が、土の神・水の神・火の神等のまつりが行われたであろう場所から、多く出土してきているのは、一つは自分で果たせないことへの成功の願いであり、もう一人の己に対する祈りでもある。

原始神道期の祭りは、内陸での山と峠の祈りが、海洋での島での祈りに変化する。この場合山の神と島輿山の神は同意であり、また祭そのものも同属系態である。

沖ノ島での祭祀において、原始形態の祭りの最終段階に、多量の滑石が使用されてきたことは、近い地域に滑石が産するだけでなく、石が持つ力、いわゆる永遠にくずれない硬さを、強さと判断した古代人の心である。一方この力を霊力とも神力とも想い、力に対する願いが祈りとなり現われていると考えられる。（松）